



大内中だより

きつきの丘

【学校教育目標】
「あいさつ日本一を目指して」

令和6年3月13日 第46号

大内中学校 第9期卒業証書授与式より

答 辞

近年まれに見る暖かな冬となり、一足早く春を感じられる今日、私達五十一名はこの学び舎から巣立ちます。



三年前、期待と不安と大きな希望を胸に臨んだ入学式。新しい仲間や先生方とは、ここで出会いました。出会った仲間とはすぐに打ち解け、いつの間にか不安はなくなっていました。また、部活動や生徒会活動などを通して、先輩方から多くのことを学び、その偉大さを知りました。中学校での生活にも慣れ、後輩ができた二年生。先輩である自覚をもち始め、自分たちが学校を動かしていくのだと、自発的に行動するようになりました。コロナ禍でも学校を楽しめるようにと、ラジオトークやビブリオバトルなどの新しい活動を考え、生徒会活動を充実させていきました。

そしていよいよ最高学年。新型コロナウイルスの規制が緩和され、以前のような学校生活が戻ってきました。五月に行われた運動会では、学年や団を越えて応援し合い、大中学生の絆がよく表れていました。汗の輝く、みんなのいきいきした姿は忘れられません。また、九月の修学旅行では、念願の東京方面へ行きました。ディズニーランドではディズニーの魔法にかかり、みんなではしゃいで、あっという間の一日でした。その他に上野公園や証券取引所などにも行き、初めての物事にたくさん触れ、まだまだ知らない世界が広がっていると実感しました。みんなで作った由利本荘市PRパンフレットを都会の人にどきどきしながら渡したこともよい経験になりました。また、普段は語らない話でみんなと盛り上がり、さらに絆が深まった三日間となりました。そして、最後にして最大の行事である大中祭。今年度は四年ぶりに地域の方にもパフォーマンスを見て頂くことができました。合唱コンクールは、どのクラスも特に力を入れて練習し、本番では美しいハーモニーを届けることができたと思います。最後のダンスも会場全体を盛り上げました。みんなで思い切り楽しんだ、最高の思い出です。また、部活動も心に残っています。技術だけでなく、思いやりや感謝の心も学びました。勝ちも負けも経験し、仲間と共にいくつもの壁を乗り越えてきた三年間は、これからの生活において、大いに役立つものとなることでしょう。

在校生の皆さん、力になれないこともあり、頼りない先輩だったかもしれませんが、信じてついてきてくれてありがとうございました。皆さんとの思い出も宝物です。春からは皆さんが大内中学校の伝統を引き継ぐこととなります。仲間を信じ、支えてくれる先生方に感謝して、たくさんのおいしい思い出を作ってください。

先生方、優しく、厳しく、そして丁寧にご指導くださり、本当にありがとうございました。進んで学びたくなる工夫された授業で、学びの楽しさを知りました。また、悩みがあれば話を聞き、一緒になって考えてくださったおかげで何度も救われてきました。心も大きく成長することができたのは、先生方のおかげです。校務員さん、事務の先生。私たちが安心して学校生活を送ることができたのは、皆さんが環境を整え、支え続けてくださったおかげです。ありがとうございました。

お父さん、お母さん。中学生になり、少しは自立したつもりでしたが、振り返ると、支えられ、見守られてばかりだったと感じます。こんな私たちを根気強く支え続けてくれてありがとうございました。まだまだ未熟ですが、新しい環境でも努力を続け、いつか必ず恩返しをします。それまでもう少し見守っててください。よろしく願います。

そして、大好きな三年生のみんな。本当に個性的で仲のいい学年だったと思います。真剣に取り組んだこと、ぶつかり合ったこと、くだらないことで笑い合ったこと、とても充実した三年間は毎日が記念日でした。そんな生活も、もうすぐ終わってしまいます。かけがえのない時間をありがとう。一人一人進む方向は違いますが、ずっと仲間です。いつかまた会えたら、この思い出の続きを話しましょう。

最後になりましたが、私たちの中学校生活を支えてくださったすべての方々へ改めて御礼申し上げますとともに、大内中学校の更なる発展を願って、答辞とさせていただきます。

令和六年三月九日

卒業生代表 ○○○ ○○

送 辞



大地の穏やかな温もりと天上からの暖かな日差しに、春の気配が感じられる頃となりました。風がおおる今日のよき日、この大内中学校を卒業される五十一名のみなさん、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

みなさんは、大内中学校で学んだ三年間で、数え切れないほどの思い出ができたことと思います。卒業を迎える今、どのように中学校生活を振り返っていらっしゃるでしょうか。私たちは、様々な場面でリードして下さったみなさんのおかげで、安心して学校生活を送ることができました。振り返ってみれば、いろいろな行事や部活動を通して、みなさんと共に学び、汗を流し、語り合い、喜び合った日々はとても充実していました。その時々姿は、私たち在校生の胸にしっかりと刻まれています。

「和衷協同」のテーマのもとに行われた運動会。みなさんは、私たち下級生をまとめ、準備を重ね、最高の運動会を創りあげて下さいました。団体対抗のエール合戦や全員リレーでは、みんなの心をひとつにまとめようと一生懸命私たちを鼓舞するみなさんの姿に、全力で頑張ることの楽しさや協力する大切さを学びました。

そして、最大の学校行事である大中祭。「千紫万紅」～自分たちの色で染めあげろ～のテーマのもと、みなさんが先頭で指揮を執って下さり、成功を収めることができました。合唱コンクールでは、心に響くみなさんの歌声に会場中が魅了されました。また、ステージ発表での吹奏楽部の演奏や全校で踊った大中ソーラン、個性あふれる有志発表などは、とてもインパクトがあり印象深く心に残るものでした。人を楽しませることに全力を注ぐみなさんの姿は、私たちの憧れです。

部活動でも、三年生のみなさんは私たちを力強く引っ張って下さいました。それは、技術面だけでなく、返事やあいさつなど態度面においても、お手本となり、身をもって示して下さいました。また、自分自身の目標に向かい、真剣に取り組む姿は、私たちのこれから進むべき指針となりました。

大内中学校が統合して九年。どんなときも、爽やかなあいさつが響く大内中学校は、全校生徒の誇りです。そんな大内中学校の中心となり、私たち一、二年生をリードして下さった三年生のみなさんと、もうすぐお別れです。みなさんが築きあげて下さった伝統を、これからは私たちか引き継いでいきます。

今、みなさんは夢や希望を胸に抱き、未来に羽ばたこうとしています。しかし、これから始まる生活の中で壁にぶつかることもあるでしょう。そんなときは、大内中学校で仲間と共に過ごした日々を思い出して下さい。一人で乗り越えられなくても、仲間となら乗り越えられることもあります。「試練は、乗り越えられる人にしか与えられない。」という言葉があります。何があっても、きっと乗り越えることができます。私たち在校生は、みなさんのことを応援しています。

最後に、みなさんのこれからのご健康とご活躍を心からお祈りし、送辞といたします。

令和六年三月九日

在校生代表 ○○ ○○○

校長式辞（抜粋）

この卒業という節目に当たり、みなさんに期待を込めて申し上げたいことが、二つあります。

一つ目は「挑戦しつづける」ということです。

「失敗は、自分を磨き輝かせるもの。」

これは、今年度、全校生徒の皆さんに、何度も語り続けた言葉です。失敗は、挑戦した証、行動した結果であり、自分への勲章です。スポーツで言えばシュートやスイング、スパイク、スマッシュでしょう。スパイクしない、あるいはスマッシュしない選手のプレーはミスにはなりません。もちろん、ミスをした方がいいに決まっています。でも、できる場面、必要な場面ではないのは、挑戦していないのと同じです。うまくいかなければ、やり直せばいいし、練習すればいいのです。失敗したことで、同じやり方ではだめだ、と気付かされます。自分自身の挑戦や行動から学べばいいのです。

これからも、さまざまな困難が、皆さんを待ち受けています。だからこそ、常に挑戦し続けてください。前向きな気持ちや姿勢が、これからの皆さんを鍛えます。失敗してもいいのです。そこから何度でも立ち上がればいいのです。そうした経験が、あなたの心を豊かにし、輝かしい未来の礎となることでしょう。

二つ目は、「自分を大切にすること」です。

自分の命、身体は、自分のものですが、自分だけのものではありません。私たちの祖先は、これまで様々な困難に立ち向かい、そして生き延び、私たちに命をつないでくれました。でなければ、私たちの命はなく、今ここに存在していません。また、「自分を大切にすること」ということは、自分の心と向き合い、自分と仲良くなること。あるいは自分を愛することとも言えます。時には、自分との対話を深め、隠された本音に気付いたり、引き出したりすることも必要です。やがてこれらは、「他者への思いやり」をいっそう深めていくことでしょう。

目指すのは、自分らしさを大切に、他人を尊重しつつ、自分らしく輝ける人。自分の持ち味を生かし、より多くの人々の幸せを願い、汗を流せる人。それが「自分を大切にすること」人です。そのような行動がとれる人こそ、大内中学校が誇る先輩であり、地域にとってかけがえのない人材になるのだと思います。どうか、母校である大内中学校が誇る人材として、また、大内地域の一員として、活躍してくれることを期待します。

「失敗は自分を磨き輝かせるもの」、「自分を大切にすること」。

この二つを、私からの餞の言葉といたします。